

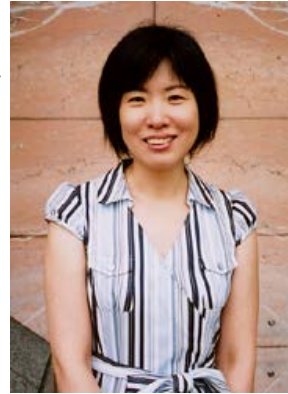
《専大校友を訪ねて》

韓国の現代文学を若い日本人に

—韓国語・日本語翻訳家 日本文学研究者 きむ ふなさん(平16院文博)

「日本語から韓国語へ」「韓国語から日本語へ」。双方をこなす翻訳家として貴重な存在。今、韓・日の文芸誌(韓国は「現代文学」、日本は集英社「すばる」)に同時連載中のソウル、東京在住の二人の女性作家による往復書簡「山のある家、井戸のある家」の両語翻訳に取り組む。二人は、韓国現代文学の旗手と言われた申京淑(シン ギョンスク)『寵児(ちょうじ)』で一世を風靡した津島佑子。書簡には折々の暮らしが繊細につづられ、両国の社会の変容や異文化が浮かび上がる。

「作品を汚さず、こぼさず、磨いて透明にする。言葉の一言一句にこだわり作品が読者へ素直に伝わったらうれしい。翻訳家の醍醐味ですね」



ソウル出身。日本で作曲を勉強した父親の影響で、日本の文化に興味を持つ。誠信女子大学大学院で日本語・日本文学を専攻。母校で日本語講師を務めた後、93年から3年間、国際交流員として島根県松江に滞在した。95年、松江での「日韓文学シンポジウム」で通訳を担ったのを機に、両国の代表的現代文学者との交流が広がった。「日本文学をさらに深く広く」と本学大学院に。柘植光彦教授の指導で「在日」女性文学者の作品研究により、博士号を取得した。

—昨年、韓国ハンギョレ新聞に連載され、大反響を呼んだ韓日共同小説(作家は孔枝泳(コン ソヨン)と辻仁成)の翻訳と両作家の仲介を務めた。両国で単行本化され(邦題『愛のあとにくるもの』幻冬舎刊)、韓国では2巻で25万部のヒットに。両語翻訳家として表舞台に立った。

専大時代「偶然始めた」翻訳が、気がつくと本業に。日本人男性と結婚。今夏、本拠をソウルから横浜に移した。反発しつつ引かれ合う両国の関係を見つめ、「旬の作品」を今後は日本から発信する。

残念なのは、韓国での日本現代文学熱に比べ、日本では韓国現代文学がほとんど知られていないこと。「韓国の有望な作家の作品を日本人に、特に若い人に紹介したい」。柔らかな表情で語った。